

は神を神でなくすることで。よこしまな時代は神なしで生きる時代のことです。そして、今まさに世界の姿は神なしに動いています。それが成り立っているように見えるようになっていきます。

主イエスが嘆くような中で、この父親は自分の息子が憐みを受けて癒されることを願います。救いを求めているのです。ただ癒されることが必要なのではなく、憐みを受けることです。世界が発展しても、救いもたらされるわけはありませんでした。むしろ憐みを失いました。人の欲望を満たそうとしながら、人間的なものから押しやられてしまったのです。人の痛みも嘆きも空しさもなくすることはなく、むしろ人を閉じ込め支配しているのです。

主はその子連れられてこさせ、悪霊を追い出し癒されました。

弟子たちは主のもとに来て、なぜ追いつけなかったかをたずねます。主は信仰が薄い(小さい)からだとはっきり答えました。からし種一粒の信仰があれば、山を動かすことができますと言います。

主は信仰の小ささを問い、小さな信仰があればと言われます。ではわたしの信仰はどうでしょうか。信仰が問題になるのはいつもその小ささを知らされる時です。信じられなくなり、折れなくなる時です。自分の「信仰心」は「信仰」とは違ってきます。なぜなら、「信仰」は自分のものではなく、与えられるものだからです。信仰は神が与えられるところにある。わたしたちにすれば信仰を求める

ところにこそ信仰があるのです。

それは、例えば祈る時のことを考えることができます。祈りは祈ることができるときよりも、祈れない時の祈りこそ祈りの心をもたらします。祈ることができないでいるとき、言葉にならない苦しいうめきのような時があります。

その時には霊が言葉に表せないうめきをもって執り成してください。ローマの信徒への手紙八章二六節にある、うめきにしかならない、祈りにならない祈りの方が心は真剣です。そのような祈りの心を持つとき、むしろ執り成しを受けるのです。

信仰が分かるのは、自分の信仰を誇る時ではありません。フアリサイ派は自分たちの持つ真面目な信仰を誇りました。わたしたちも自分には小さいけれども信仰があるということが大事なではありません。

信仰のからし種に及ばない小ささ、自分の信仰のなさを知らされるとき、必要なことが見えてくるのです。

マルコによる福音書九章では、この父親が「おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」と言います。主イエスは「できれば」と言うか。信じる者には何でもできる。」と答えます。すると父親はすぐ「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」と叫びました。わたしたちに必要なのは自分にどれだけ信仰がないのかを知ることです。そして、必要なのは赦され救われる、そのことに気付き、求めることです。

この箇所は、主イエスが十字架に向かつて

歩み出された、初めの部分です。主は十字架の贖いによって赦しを与え、招き、赦しをお与えになるのです。

「できないことは何も無い」とはなんでもできる、つまり全能ということです。全能は神様のことです。神がその全能をもって赦すことは「信じます。信仰のないわたしをお赦しください。」ということを実現してください。この救いを受け入れることです。信じるものには何でもできると言われたとき、信仰のないものが必ず赦される。そこに信仰の種があるのです。

教会はこの信仰に立つてきました。それは、主イエスに寄り添っていたかなければならないことです。わたしたちの喜びはこの教会の歩みが、現実に見える地上の教会として歩み、それが主イエスと共に歩むものであったことを喜ぶことです。

(一〇月一日 創立記念礼拝)

一〇月講壇一覽

第一主日(一〇月一日) 創立記念礼拝

詩編 一三・二六

高橋和人牧師

第二主日(一〇月八日) 公同礼拝

詩編 一一八・二二

姜 匠米牧師

使徒言行録 四・一

四・一